いで此の棕櫚樹不親切に觸つた手は必ず動かなくなるといふ事である

『それは其の筈ですわね、アングリスさんのポケットから生へ出た棕櫚なんですもの』とガロンドウ嬢は優しく結んだ。

影

春草

夕闇の中に際立つて白い汀を私は夢みる心地に歩いて居る。

天の川の糠星は既に秋の眼を見開いて瞬き、水の面を辷つて來る風は引つ切りなしに流れて地上の夏をぬぐつて行く、其癖海はひつそりと凪いで丁度死の床に臥して居るものを憚るかの樣に磯打つ浪さへ弱々しい。

折々は音もなく寄せ來る浪頭が足を撫でてはさざめき乍ら退き、深くふみこむ足駄にまじる眞砂も煩はしい。

埃の中を汗にまみれて宿に着いたのはつい先刻だ。夕餉をすます迄は落つき兼ぬる心から何も考ふる餘暇が無かつた。

衣を替へて濱邊に立つてはじめて「此所が臼杵だ」と言ふ感がしみ〴〵と起つた。

立渡る靄の薄衣に纏はれ乍ら私を圍繞して居る目新らしい風光を恆と眺めて居ると朧げな言ひ知れぬなつかしさが胸にあふれた。

私の故郷とは五十里をへだてた此地へ來たのは今がはじめてだ、けれど何となく四圍の事物とは舊知のやう

に思はれた。

若し來た事が有るとすればそれは餘程の昔だ。

遠く離れて暖かい春風が絶えず吹き渡つて和らかな花の精に包まれた世界に住んで居た時分幼い私は母にでも連れられて來たのだらう。

勿論そんな空想では飽足らないので私の一身と此地とをつなぐ目に見えない絆が有りはせぬかと模索に耽らうとした時閃の如く喜内と言ふ人物が頭に浮んだ。

喜内は「曾遊の思」の誘導者であつた。私は謎の解けたやうな氣がした、それと共に喜内に對する不安の念が襲つて來た。

水と陸との闇を兩分して何所迄も〳〵續いた白い汀を私は今尚夢見る心地に歩いて居る。

二

私の知つて居るのは聾者になつて後の喜内だ。

新木の香の高い舞臺にはぴか〳〵した衣裝を着飾つた役者が何だか踊つて居た。

私はそれに趣味を持つ程な年頃では無かつたので伯母の膝にもたれて頻りに「歸る〳〵」と駄々をこねて居た。

伯母は連れて來て居た喜内に手眞似半分に何か命した。喜内は私を抱き取つて木戸口を出た。

今迄人の息に蒸された芝居小屋を出ると急に氣が活々する。天女の衣を引きのべた樣に薄つすらと霞んだ中から星が覗いて居る美しい春の夜で有つた樣に思ふ。

私を背負つた喜内は菜の花のあまい薫が鬱した畷路を行く、蛙が折々足元からとび出した。
高い杉垣にかこまれた家の角を幾つも曲つて淋しい山坂にかゝた時喜内は私を背にゆり上げて後ろへ廻し
手で私の腰のあたりを輕くたゝき調子を取り乍ら
――里への土産に何貰ふたでんぐ〳〵大鼓に笙の笛――
と子守歌を唄ひ始めた。
耳元で大きな聲がした。目を開いて見ると私はいつの間にか家へ歸つてまだ其頃は足を切つて居なかつた
父に抱かれて居た。
父は椽に立出て大聲で
「御苦勞ぢやつた、早く歸つて休んだりや」
と言つて居る。喜内は掌を耳朶の後にあてゝ少し首を傾けて聞いて居たが丁寧に辭儀をして木立の朧に消
た。
それは私の母が亡くなつて間も無い頃だから私は四才だつたらう。喜内は其前の年に耳が惡くなつたと聞
た。
これ以前に喜内が私に與へた印象は一つも殘つて居らぬ。
雨の石芝を打つ音が物淋しく聞こゑてひたすらに母懷かしい宵や、木立の端れの日當てのよい所で落椿を
ないで花環を作り幼い技術に己惚れて遊んで居る時など伯母はよく色んな昔ばなしをして居た、又時々は
内の生ひ立ちを委しく語つた。

「喜内のたやぢは圭助ちうてな、こちらの譜代の若黨で主人思ひの一徹者、一度言ひ出した事は是が非でもし通すと言ふ風な人間で喜内が十一の年女房と前後して死ぬる迄人並外れに丁髷を結んで居たぞな。」

伯母が其噺をする毎に冒頭はいつもこれだつた、そして指を妙に曲げて頭の上へ持つて行き、丁髷の形をせてるのだ。やがて疎らに殘つた齒の見ゆる迄に口を開いて顏の相好を崩して笑ふ

「圭助の亡くなる時は見事ぢやつた。斷末魔の苦しみの中に床の上に起き直つて喜内を引きつけて自分の顏喜内の顏に擦りつく位に近ませ、喜内!!れが貴樣に殘すのは祐定だけぢや人手に渡しちやならぬぞ貴樣死場あ御宅より外にあ無いぞよと言つて芝居の樣な往生を遂げました、圭助の臨終の口上は平生から考へ置いた取つときの詞ぢやつたかも知れませぬな。」と言つて又笑ふ。伯母も隨分皮肉屋だつたと思ふ。

孤兒になつた喜内は私の内に引取つて世話した。非常に利發な子で何を敎へてもよく覺へた。綺麗な白い顏眉が上つて口元が締つて何所となく由緒ある家に生れた人らしく凛々しい所が見へた。そして生來自信と氣との權化とでも思はるゝ性質で只一つの欠點は折々我意を張り通すにあつたそうだ。大學や考經なども未者に讀むし碁や周易迄も出來る程になつた。父も折に觸れては

「喜内は田舍に朽ちる奴ぢやない。何れ東京に出してやろ。」

と言つて居たそうだ。喜内が十八の春、父の留守に山を見巡りに行つて一日逗留して歸つて來た。面輪が変れて只ならぬ樣子を伯母は目敏く見て

「氣分でも悪いかな」

と聞くと、風邪の氣味で頭が重いから何か藥をと少さな聲で答へた。藥を貰つて喜内は家へ歸つた。喜内は

起臥する所は私の屋敷の一隅に松や檜の苗木畑を背にしつらいたさゝやかな物であつに。

次の日伯母が行つて見ると喜内は壁に面して寢たまゝ身じろぎもせなかつた。

二日目の午下り喜内の宅の軒から薄い煙が上つた。少し快くなつて何か炊いて居るのだらうと思つて伯母が見舞に行と是は又見違ふ程の痩せ衰へて丹前にくるまつて鉢卷をしめ、湯を沸して居る。譯を聞けば、今朝谷向ふの狐使ひの巫女の所に行つて神樣に伺ふと、山巡りの折物の氣が祟つたのだと言つて此護符を呉れたので今呑む支度をして居るとの事。伯母は呆れて散々其不心得を諭し「發明なた前にも似つかぬ」と戒め醫者をすゝめたが平生の氣質に加ふるに病氣だから我意の一徹で迷信の愚に拂はれて仕舞つた。伯母はこれを話すと御定りの樣に

「あれ程な賢い聞分けある子が其時に限つてつまらぬ迷に落ちたとは不具になるとの前世の約束ぢやつたかやろ」

と言つた。

病人は翌日も巫女の所に行つた歸りには杖にすがつて居た。其翌日は這ふ樣にして行つたが歸りには半死の姿で戸板に乘せられて來た。

其まゝ床について八十日の間寢反りさへせず生死の境にさまよつた。熱に浮されては巫女を罵つたり、大學者になるのだと言つた。病名は傷寒だと聞いた巫女から裸体にされて水を注がれ、打たれなどせぬ前なら這那にならずと濟んだのだろうと醫師は語つた。

辛つと病から免れて後の喜内は昔に變るみすぼらしい姿であつた。頭の毛が薄くなつていつも身体が惡

耳鳴りがすると言つて、ごろ〳〵寢そべつて居た。

秋も半に近くなつた頃喜内は父に請ふて別府の温泉に湯治にとたつた。

さぎりが谷を埋めつくして轅を刺すに忙しい百舌の聲が早くも染み出た山櫨の木立を通して聞ける朝、門迄送つて駄洒落や無駄口を利く下男供に挨拶して長い堤の上をとぼ〳〵と向ふへ行つた喜内のうそ寒さうな後姿を見送つて伯母は何となく喜内の未來に起る禍の兆が見ねて居る樣に思つたそうだ。

漸く秋が暮れかゝつた。作男共は薪を樵り、樟苗や柑類に霜よけの藁をかけ、桑の削木をするなど冬待つ仕事に日も足らず立騷いで居る或夕暮だ。伯母は下女が竿からぬいた洗濯物を砧盤にのせてたゝくのを、椽に腰を下して見て居た。砧の音は寒く立つた木立の病葉をふるはせて冷たい池の面に落ちて擴がる。淋しい合だと思つて伯母が見るとはなしに桓の向ふを見ると、早やほの暗くなつた芒原の小路を足音さへ無く影の如く歩いて來る者がある。魂のぬけた樣な青い顏をうなだれて喜内が歸るのであつた。

「只今歸りました」

舌の動きもの〳〵しく、幾分鼻音の雜つた聲で言つた。

「からだは快くなつたかへ」

伯母が問ふても默つて地を見つめて居る。

暫くして振り上げた顏に眼が怪しく輝いて口元が妙に力なく既に聾者の特色が表れて居た。

「御袋樣！私ももう駄目で御座います――――私は物が聞にませぬ――――此所に居るのは喜内の生きた死体で――――」

と切々に言つて又、ぐたりと涙にうなだれた。

別府に着いて後、身体を回復しやうとの一念から例の我意を張つて一日に幾度となく熱い湯に入つたので、下地に悪かつた耳が醫師も見捨てる程になつて、二尺の所で大聲を聞くよりも一町距て手眞似を悅ぶ憐れに陷つたそうだ。

伯母は話を語り終ると疳とか言ふ病から來た弱い痙攣で首から上をかすかに左右に動かし乍ら

「好い若者ぢやつたが惜い事をした。强情は圭助が子に殘した敵ぢや。才氣の有り餘る程な喜内の事ぢや、けゝいんま何か一仕事初めるぢやろ」

と言ふのが常であつた。

幼い私には伯母の物語りの中に解し難い節々が多かつた。伯母は此外に何か言つたかも知れない。今から見れば其頃の事は夢の中に花の香をかく如き思がする。

十年の月日は幾多の變遷の跡を止めて過ぎ去つた。私が中學校に通ふ身となつて間も無く伯母は中風症ではかなくなつた。

喜内は其年が三十だつたと思ふ。妻を迎へてはと父が再々すゝめたけれど聞かない。耳は彌增しに疎くなつたが人の心を目色などで推量する事は著しく巧であつた。喜内は稀に物を言つたがそれさへ只必要に迫られての發言で皆と一つに動いて居る時でも他の人が唄ひなどする口元を見つめて居ることがある。一寸見では生れながらの啞者とより外は受取れまい。私は喜内にひどく同情して居た。喜内は又他の者より特に私に親んで居るらしかつた。

三

私の土地では四月と九月の望には舊藩士が集つて新宮の馬場で三つ物の立射をやるが例である。九月の或朝早くから見に出かけた。小筥などに圍まれた昔の士族屋敷の跡を貫いた小路を行く。小倉の城が燒かれて豐津が小笠原氏の新城下となるや二里四方の錦ヶ丘は花の衢と變つた。それが又廢藩の打擊に會つて生産の無い土地の悲しさ、日を追ふて衰頽に陷つて七十年前の姿に歸りつゝある、見極めのつかぬ小松原の果てから冷かな秋風が野路一面に擴がつて吹く。萩や芒をつづれる露の玉は美しい。坂を下つて一段低くなつた所が新宮だ。松や櫻の植込みの間を縫つて三階菱の紋を染めぬいだ幕を張つた中に烏帽子直衣の裝束つけた老人達が二三十人居流れて居る。

何かの會圖で一齊に立つて一寸舞踏に類した事をやる。緋や紫の袖が擦れ違ひ入れ交る。封建時代の空氣が袂の下から吹き起る樣だ。

軈て一同弓矢を取つて横に目の高さに擧げ更に取直して一人々々前に進んで向ふに立てた張子の鹿に向つて弦を張る。弦音がして射手の頤の下に餘つた黄色の纓が幽かにゆるぐ。鏑矢は紺青に澄み切つた秋の空に高鳴りを引いて鹿を射貫くと見れば安土の一方から采配を打ふる。見物は拍手する同し事ばかり繰り返してやる。

私は見倦いて來たので廣場を出てだら〳〵の坂を上つた。昔國分寺の經堂があつて大友氏の豐前侵入の時兵火に羅つた趾だとか言つて、よく梵字の刻んだ礫や古瓦の出て來る草原の臺に立つた。

弓場は眼下に見わたして居る。向ふの賑かさに反して此所はひつそりとして居る。松の梢に輕い音を立てゝ渡る

風が草に落ちては萩の花がはら〳〵とこぼれ、頬白が通草の下葉を踏み落し、鳴く。[illegible]ふと氣がついて見ると。四五間離れて咲き崩れた萩の陰に人がしやがんで居る。喜内だ。私が來たとも知らぬげに專念に立射を見て居る。

頬の肉に締りがなくて、ひどく色澤が悪い。

如何にも人生に疲れ切つたやう、寸度無人島に獨りで生きて居る人の如く心からの寂しさが顔に現れて居る。昔の覇氣や野心はその寂しみに打負けて石の様なあの頭の中に凍つて仕舞つて居るのだ。丸で世の中の裏面をたどつて行く影の如き人間だと思ふと同情の念が犇々とこみ上げる。

「喜内っ」。一聲呼んだが見向もしない。「聞こないのだな」と獨語しながら喜内の目に立たない内に其所を立退いた。

歸る道すがら今日に限つて妙に喜内の事が氣になつた。[illegible]

歸ると直く袴も取らずに喜内の部屋に行つて見た。大きな櫟林で南表を塞いだ室はいやに陰氣だ。時をも辨ぜず鈴虫が凉しい聲を張つて居た。

上つて見ると勝手の方は左程にも無いが喜内が書齋ともして居る八疊はよく掃除が行き屆いて床には圭助とやらが臨終に氣をあんだ一刀が塵も止めず飾つてある。

相間々々に渡り物の草花を咲かせた苗本畑に面して文机が据ゑて「コスモス」をさした一輪活の横に桑のはさんだ宗教通覽と妙な字体で書いた書物が有る。手に取つて見ると東西のあらゆる宗教をあげて其等の主義と盛衰の跡を簡單に書いた物だ。[illegible]

好奇心から桑の所を開くと一型少さい活字で天理教及神理教と題してある。喜内は此所に矢多羅に赤い線を引つ張つて居るそして餘白の所へ何か續け字で註を入れて居る。よくは讀めないが何でも「宗教に二種類ある今後起るのは衆生の利慾に乘じて己れに德とせしめる邪宗計りだらう」と言ふ事らしい。私は頭の中の喜内の顔と此の至極平凡な宗教論とを對照して「あの面でこんな言葉」とほゝゑみ乍ら部屋を出た。親身と異らぬ思をして居る雇人とはいへ、他人の室に無斷で入つた事が罪惡であつた如く心苦しく思つた。

黄な草原の野末は遠く午に近い日に彩られた。森の靜けさに洗つて拭つたやうに晴れた空から音もなく秋の思ひが下つて地にしみる。

葡萄畑の所迄來た時、歸つて來る喜内に會つた。私は喜内の部屋を指し書物をくる手つきをして見せると喜内は早くも解して幽かな笑――それは只重々しく口の邊の筋肉を弛ます丈けだつた――を見せて

「何の御用に及びましよ、御屋敷よりや反つて靜かに御座んすけ毎日御越しなさりませ」

と大儀ちしく酔人の吃る樣に言つた。

其後新參の下女が「喜内さんたあ妙な振する人ぢや」と言ふのを聞いて折々喜内の所作に注意したが、變つた所もなく午は作男に交つて運動機能を與へられた木像の樣に立働き夜は讀書に耽つて居るのみであつた。

其内に年はめぐつた。

四

或夜の事だ。學期試驗も近まるので私は孤燈の前に夜を更した。床に就く前少し散歩する氣で庭に下りた。梅雨に間もない空は珍らしくはれて居た。若葉を辷り落ちて木の間に射こんだ月影が敷石の上に隙間々々の

淡い影をなげて居る。

思ひ出した様に吹き來る風は眞白い柑子の花を雨のやうに零しては床しい香を庭いつぱいに擴げる。アラビヤンナイツ」にでも有りそうな夜だ子規でも鳴かぬかなと思ひ〳〵木立の中の小路を分けて居た。遠くから蜂の唸る様な聲が聞える。私はその方に次第に近づいた。人の聲だ。風が吹き荒ぶ頃枯芒が廣い野原に悲しく鳴る聲にさも似て居る。

夜露に月光を受けて劍の如く輝く木の葉の下をくぐつて夜の空氣を震はせて陰に籠つた音が途切れ〳〵にひゞく。

椎や樫の古木が肩を聳やかし大手を擴げた所で杜の小路はつき少し許りの草原を距てゝ月に磨いた池の面が半分程現れて居る。聲の主は池の汀に居た。喜内だ。あちら向に立つて空をあふいだ黑い影は杭の如く動かない。やがて胸の前に兩手を置いて變な手つきをするらしい。それが終ると例の口を塞いて物言ふ様な聲で呪文めいたものを唱へる。意味は勿論分らない。

晝間は煩雜な世間の交渉を見乍ら退いて冷やかな頭の中に潜んで居る彼れの神靈の或物が、人を遠ざかつた夜氣に觸れて首を擡げ、星に向つて人世の秘密をもらして居るのでは無いかと疑はれる。

私は足音を忍ばせて元來た路を喜内の部屋に急いだ。戸は明つ放しにして内には少さな灯がついて居る。机の上には宗教の書物が四五冊と私の讀み古しの月刊雜誌があつた。早咲の山梔子が二輪活から初夏の薫を室中に充たして居る。

私は今初めて下女の言葉を他の意味に解して居たのに氣づいた。喜内は何故あんな振をするのだらうと今に

歸つたら聞いてやらうなど考へて居る内に常と異つた所もない喜内の姿が月光の青い中から燈火の明るみに現れた。私の來て居るのを見て驚いた風もなく淋しい笑を浮べて私の横に座つた。

兩人共暫く無言で顔を見合せて居た。更けた夜は極めて靜かだ。兩人の周圍には堅固なかこひが作つてゞも有るらしく覺える。短い時間は鋭く永い過去の回想を兩人の上に強ひた。

此く面を對つては「わまへは變な眞似をするね」などぶしつけには問はれない。

「大きく御成りましたな」と喜内が突然口を切つた。私は今迄喜内の支配者で同情者だ、何でも喜内の力になつて遣らうと思つて居る矢先、向ふから高く出られたので一寸妙な氣がした。

「先刻は森の中に御ざつて蚊が刺しましたぢやろ」喜内は引つゞいて言つた。

私は居住ひを直す迄驚いた。自分の耳にも立たぬ位な足音で木の下暗を機敏に進退した私を、聾の彼れが如何にして見つけたぢらうと、何となく恥かしく又畏ろしくも覺える。

喜内は其夜に限つてよく話した

「私は耳が悪くなりまして以來大變心の動きが鋭く時によつては聞えぬ筈の音迄響きます。」

勿論それは虚言だらう、そんな筈がないと思つた。喜内は又眞面目に

「音ばかりでは御ざいませぬ、人の心の底も解ります。失禮ですがあなたは今私の言ふ事を信じて居られません、又私の先刻池の汀でした素振を怪んで居られますぢやろ」と言ふ。最早私は喜内の心に捕へられた。喜内に對するに畏敬より外はない。然し殘念だ、私はどうして今夜に限つて聾を壓服する丈の言葉が浮ばないのだらう？

「甚だ勝手な申分で御ざいますが私は當分御屋敷に御暇がいたゞき度う御ざんす」と喜内は願請の態度になつた。理由を問はうとする私をさへぎつて

「死んだ父の申聞けも有りますなり何れ早晩歸つて來ますが暫く豐後の臼杵へ行つて參ります」と言つて後は何も言はない。問ひかけても、もの想ふ樣子で默つて居た。

書齋に歸つて床に就いたが、喜内の心惜き迄落ついた言葉ぶりと常人を超越した洞察力とに氣を廻らして眠られなかつた。

翌日父に話すと父はあく迄「淋しさから精神に異狀を來したのだ」と言つて喜内を呼んで小供を慊す樣に色々慰めた末、敎の辛さを說いて止めたが駄目だつた。吐る樣に言つても聞かない。

それでは餞別に金をやつても取らなかつた。

五

其後喜内は一向に立つ樣子も見ゆず、今迄と異る所も無しに日を送つて居る内に早や秋の取入れ時となつた。田に鎌を入れ初めて、三日目計りに小笠原神社の祭日が來た。此日は私の土地では三大節と並んで重んせられる日なので遠近の知人など大低招待する。重な客は初めの日に呼ぶ。二日目は内輪の者の酒宴だ。離室の方では男どもが大賑ひに浮かれて居る。私は室に引籠つて何かの本を讀んで居た。暫くして離室に吐き出す樣な大勢の笑聲が起つた。身を起さうとする途端に昨日から來て居る十一になる從弟が私の室へ驅けこんで笑ひ倒れた。「兄さん」と辛じて言ふ。

「何かん？」と聞くと横腹を押さゑ乍ら

「豐が歌を唄うたぞな。はじめから酒もたべず話もせず他の者の顔ばかり眺めて居るから、外の者が皆で、喜内さんの歌は聞いた事がない唄うてごろじ、と大聲で言ふたりあ仕舞に唄うた」

「何と言ふてなら」。私も可笑しくなつて來た。

「目をつぶつて變な節まわしで、泣くとも笑ふとも分らぬ聲をあげてな

有明にともす油は菜種の果てよ、蝶がこがれて會ひに來る

と唄うて、小聲になつて、淺からぬ緣ぢやもの又會ひますいな、と言ふた、あまり歌が可笑しかつたので皆が手を打つて笑ふと、それ程私の歌が御氣に入るなら旦那樣や若旦那にも一節御聞かせしやうかと眞面目で言ふのぢや」

私は哀れに思つた。そして喜内が立つのも近々ぢやと思つた。

其夜尙客が四五人あつて酒の座が果てゝ謠曲が初まつた。

忘れは草の名に聞きてしのぶや我身なるらむ

と父が大佛供養をやつて居る。聞いて居るうちに私は机にかゝつたまゝ轉寢をした。

腋の下の薄ら寒さに夢冷やかにさめた。二時が過ぎて居る。家中は寢て仕舞つて鼾や齒ぎしりなど靜中の動が絶えてはつゞく。何處かで蟋蟀が一つ更け行く秋を心細く鳴く。身にしみ入るしゞまだ。戸を引くつもりで障子を明けると向ふの木立を通して喜内の部屋から灯がもれる。

急いで下駄を突つかけて畠を横切り木立の蔭迄來た時足が地面に粘着いた樣に立止つた。

がらんと片つけた室の中に旅仕度をした喜内が裸蠟燭の光に祐定の抜身を閲して居る。

寒さがぞつと身にしみる。双刄を打かへし〳〵匂ひを見入つて居る喜内の袖の上で刄が伏しつ、起きつする毎に冷たい光が迸る。

まだ彼れの顔に見覺えのない凄みを帶びた笑をもらして砥の袋ではた〳〵と刄をはたき、奉書で丁寧にぬぐつて鞘に納め袋に入れた。そして默念と天井を見つめて居る。矢張り淋しい影が後から彼れを抱きすくめて居る如き思がする。

一寸別れを告げて遣らうかとも思つたが夜中に立つ位だから人に會ひたくも無かろうし、又私が此所に立つて居るのは、知つて居るかも知れない。別れが告げたくば向ふから來る筈だと思つて其まゝ踵をかへした。夜露に濕つた衣の裾が慄かつた。

翌朝早く下女が「喜内さんが逃げた」と言つて家中を起して居た。

其日から彼が一人居なくなつたため、私の内は餘程淋しさを覺えた。

私は夜更など書見に倦いて窓の外を見る時喜内の部屋に灯が見えぬのに氣つくと、禁煙して間もない人が習慣的に「ポケット」を探つた時に起すと同じ物足らぬ氣がした。

六

喜内が去つて五年は夢の間に過ぎた。一度の音信もなく彼れの消息は杳として知れぬ。今は噂する人さへ居ちぬ。私は折にふれて父に

「喜内は一向歸りませぬが其後どうしたのでしよう？」

とたづねると父は

「精神病者だ、あてになるものか」

と言ふ。あく迄精神病者だと押しつける父の心が恨みだ。私は絶對に喜内は精神に異狀はない、のみならず、中々才智の漲つた男だと思ふ。

私は又這那事を考へる、喜内は生來野心と自信が强かつた。巫女を恨んで神理教を輕悔して居た。宗教の書類を耽讀して居た。心の敏感で音を聞くに耳は要らぬと言つた。呪文に類した物を唱へた。是等を以て考へると彼れは一種の宗教めいた物を起すつもりでは無かつたらうかと。

然しそれはあまり飛び過ぎた想像かも知れぬ。

又臼杵に行くとは何の因る所が有つたのだが、私には解らない。私は喜内は思ひ出しても臼杵は思ひ出せなかつた。

私は今日此町を一週して宿を定めた。若し喜内が心の直覺的な働きで私が居るのを知つたら、訪ねて來そうなものだ。啞者や聾者の頭は冷酷だ。自然に呪はれた者は自然を呪ふ。人情なぞ知るものでない。私が來てるのを見た所で喜内奴會ひに來るものか、と捨鉢になる片はかしから喜内だけは除外例にしたくなる。喜内によく似た聲がする、喜内もあの樣な足音をさせて歩いたと思ふ。行き違つたのは二人の漁夫だ。喜内にはもう會はれまい。喜内は今の漁夫よりも稍ゆるやかに、私の眼を過つた一つの影に過ぎぬのだ。氣がついて見ると空は荒れ模樣に曇つて、闇は彌增しに濃く、沖に漁火が二つ、惡魔の眼の樣波に寫つてゆら〳〵と動く。私はあの夜の裸蠟燭を復た思ひ出した。

（完）